

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 18 回 第 5.5.5 節～第 5.8 節

2018 年 9 月 15 日

小 田 勝

「5.5.5 特殊なキ形」の 151 頁、用例(1)の類例をあげる。

- ・瑞玉^{みづたまうき}盞に 浮きし [宇岐志] 脂 落ちなづさひ (記歌謡 100)

「かねてより」など継続的な意を表す語句と共に用いられる「き」は、過去の事態を表すが、時間の幅として現在をも含む。

- ・娘子^{をとめ}らが袖布留^{ふるやま}山の瑞垣^{みづがき}の久しき時ゆ思ひき [憶寸] 我は (万 501)
- ・かねてより我が惜しみ来^きし春はただ明けむ朝ぞ限りなりける (千里集)

次例 (1302-06 年頃の文献) は、現代語の「それ見たことか」と同じ構成、意味かと思われるが、どうだろうか。

- ・太子 (= 聖徳太子) の冥慮を憚らず、ただ食欲の心にのみ住して掘らずれば、[聖徳太子ガ埋メ置カレタトイウ瓦ヲ] 掘り出ださぬこそ道理なれ。さ見しことよと言ふほどに、いとほどなくて、同八月晦日、この僧自ら剃刀をもちて我が喉をかき切りて死亡しぬ。(五代帝王物語)

152 頁「5.5.6 ケリ形の意味」は、よく分からないから、いくつかの類例をあげるにとどめる。153 頁用例(13)の類例、

- ・今聞^きくに、仲麻呂と心を同じくして、ひそかに朕^{われ}を掃^{はら}はむと謀^{はか}りけり [家利]。(続紀宣命 29)

用例(14)の類例、

- ・昔見^{いも}し妹が垣へは荒れ^{すむれ}にけりつばなまじりの董のみして (堀河百首)
- ・ふるさとは見^みし世にも似ずあせ^{あせ}にけりいづち昔の人行きにけん (山家集)

154-155 頁用例(26)(27)の類例。

- ・入江をかしかりし所に、松のありしを見て (大弐高遠集・詞書)

「5.7 未来」の 156 頁 6 行目以下に、「連体修飾句が未実現 (未来) の出来事をあらわすとき、古代語ではほとんど義務的にム形が現れるようである。」と書いたが、これについては、木下正俊 (1959) を参照。

156 頁「5.8 従属節のテンス」。時間的な継起関係は、「動詞基本形＋て＋後」でも表される。

- ・この皇子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば（源・桐壺）

また、次のような表現もある。

- ・よし今は〔私ノ約束ヲ〕頼まずとても〔他ノ人ノ〕言の葉の変るが末に（＝変ワッテシマッタ後デ）〔私ノ誠意ヲ〕思ひ合はせよ（風雅 1137）

動詞の連用形中止法のテンスは、主文末のテンスに従う（山口佳紀 1987）。

- ・つぎねふ ^{やましるめ}山城女の ^{こくは}木^{おほね}鋏持ち 打ちし大根（記歌謡 63）

- ・つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝とは偲ばむ（古今 486）

この原則から、

- ・わたつみの豊旗雲に入り日さし〔伊理比沙之〕今夜の月夜さやけかりこそ（万 15）
- ・狩り暮らしたなばたつめに宿借らむ天の川原に我は来にけり（古今 418）

などが問題になるところである（山口佳紀 2002、佐佐木隆 2003:3ff に面白い議論が展開されている）。

これで「第 5 章」を終える。繰り返す言うが、古代語の「き・けり・つ・ぬ」については、まだよく分からないのである（しかし、どうして世にある古典文法書は、「分からない」と正直に書かないのだろう。そもそも古典文は難しくてよく読めない（本書 713 頁）ということも含めて）。次回からは、「第 6 章 肯定・否定」に入る。

新刊の『読解のための古典文法教室』、41 頁の例題 [54] について、「…だろう-よ-ね。」とは言わないのではないかと、との指摘を受けた。助動詞階層の下に終助詞の層があり、かつ、その終助詞もまた重出する（現代語では「わ-よ-ね」の 3 語が最大）ということを示したかったのだが、確かに指摘の通りなので、重刷の際に「よ」を削り「…だろう-ね」の形にしたい。

[出典追加] 五代帝王物語②1302-06 年頃か③中世の文学

[引用文献追加] 木下正俊 1959 「入日哉」其他『万葉』30 / 佐佐木隆 2003 『上代語構文論』武蔵野書院 / 山口佳紀 1987 「各活用形の機能」『国文法講座②古典解釈と文法一活用語』 / 山口佳紀 2002 「わたつみの豊旗雲に」の歌の解釈－動詞連用形の一用法に及ぶ－『万葉』180